

アンデス文明研究の成果と課題② 博物館をめぐる

鶴見英成（東京大学総合研究博物館助教）

講師は南米ペルーで考古学の研究を進める中で、文化資源・文化遺産としての考古資料をめぐるさまざまな課題に直面することとなった。

●工芸品からたどるアンデス文明略史。土器などの工芸品に見られるさまざまな特徴を観察し、発掘による層位的な序列と照らし合わせることで、考古学研究の基礎といえる編年や地域性が解明される。アンデス考古学では、類似した工芸品が広い範囲で出土する現象をホライズンと呼び、編年の指標とするとともに、なんらかの社会的な紐帯が各地に及んだものと考え、文明史の骨子を整えてきた。しかしそういった研究のために参照されてきた品々は、必ずしも正式な発掘調査によって世に出たものばかりではない。

●アンデス文明は黄金製品を特徴とすることもあり、ペルーでは古来より盗掘がさかんであった。経済的な利益を求めての盗掘はもちろん、カトリックの聖週間（復活祭直前の一週間）に盗掘にいそむ習慣や、呪術のための呪具を求めるためなど、より象徴性の高い目的による盗掘もあり（関 2014 を参照のこと）、一掃することは難しい。しかし美術的価値の大きい品々を探す盗掘者は多く、それらこそ時代・地域の特徴を強く反映した資料でもある。出土コンテキスト不明だからといって、そういった品を切り捨てていたら、アンデス文明の全容解明は期待できない。

●博物館には収集という役割があり、ペルーにおいては図らずも世に出てしまった考古遺物の受け皿として重要である。クントゥル・ワシ遺跡では 1989 年に東京大学の調査団が、「はじめて盗掘者より先に考古学者が黄金にたどりついた」と評された、黄金製品の発見を実現した。希少な出土品であるためそれらは首都リマで管理すべきものであったが、地元クントゥル・ワシ村の人々は出土品を地元にとどめることを希望した。しかしインフラや安全面が未整備な山村であるため困難な課題であった。調査団は日本での展覧会を実現し、資金を集めて 1994 年にクントゥル・ワシ博物館を設立した。

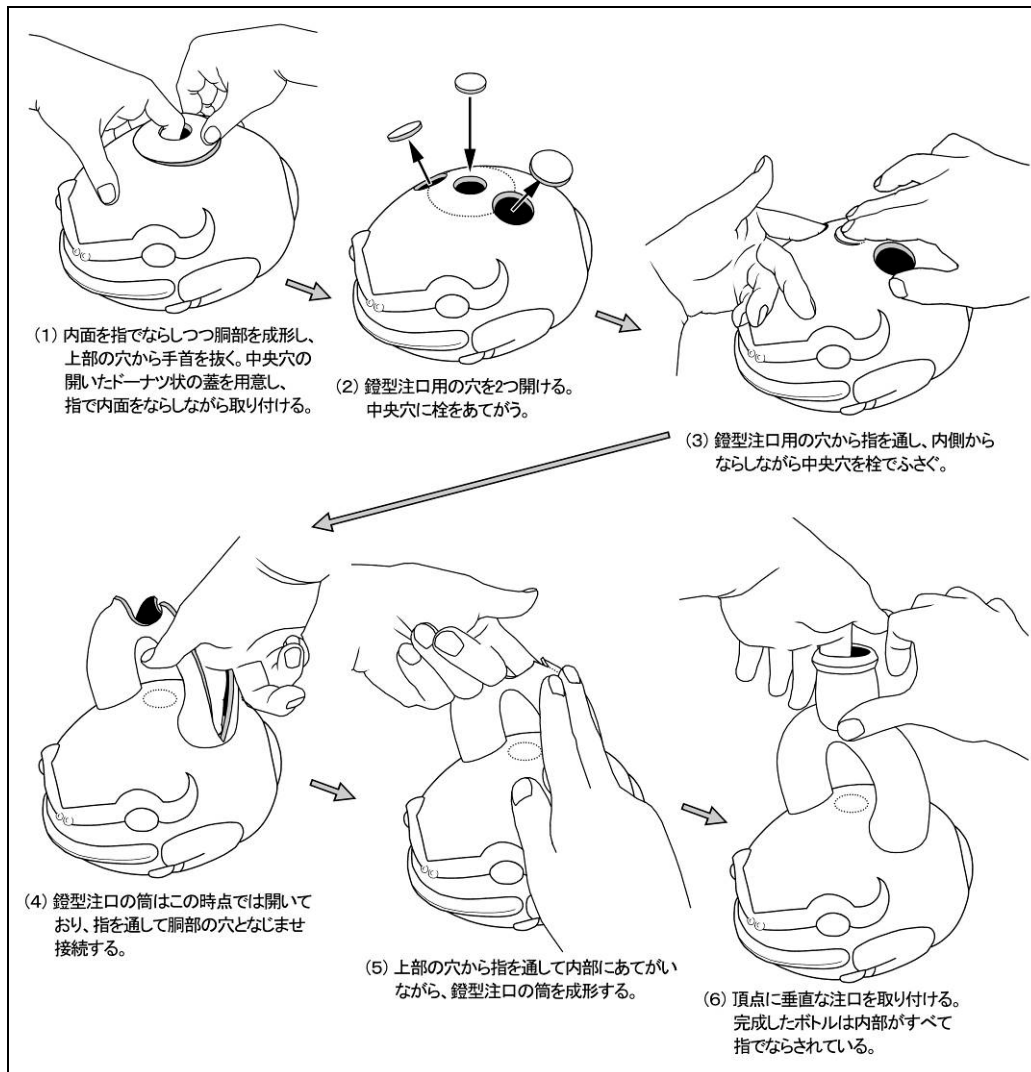
●博物館は研究機関である。東京大学総合研究博物館においても、コレクションの織物を年代測定するなどの研究利用をしている。それ以前に講師は、自身の関心に基づいてペルー内外の博物館をまわり、研究利用を申請して多くの資料を閲覧したことがある。とくに鏝型ボトルという複雑な形の土器の製作方法に関心を寄せ、形成期の作品を中心に観察した。土器の外表面は継ぎ目なく仕上げているが、破損箇所から内面を観察すると部品の接合箇所が解明できる。その結果、外部から観察しただけでは模倣できないような方法がとられていることがわかってきた（次頁図）。この製作方法は、その当時の土器製作者の社会的な役割を反映している。1 点ずつ労力を惜しまず造る形成期のボトルと、型を使って規格化・大量生産を実現した後世のボトル。技術の違いから、当時の社会の要請がうかがい知れる事例である。

●講師は博物館における展示活動にさまざまに携わってきた。土器の内面の情報が文明史研究において重要であるという上記の成果をふまえ、土器の接合・展示の方法を工夫してきた。

●博物館活動において、地域社会との関係を深く考える機会が多い。クントゥル・ワシ村においては、博物館の創設が呼び水となり、水道、電気、派出所などの設備が整えられるなどして、村人たちの紐帯を強める役割を果たしている。博物館の運営に関して日本調査団は相談役にとどまり、実務は村人たちの組織が進めている。開館から 20 年以上が過ぎたが、発掘や博物館運営に関わってきた村人たちの「土地に根ざした主観的歴史観や記憶」（関 2014:194）をひとつの拠り所として運営は続いている。

1960 年代に東京大学の調査団はコトシュ遺跡で「交差した手」を発見したが、最初に出土した「男の手」が何者かに破壊されてしまったため、次に見つかった「女の手」をペルー政府の指示にしたがい壁面から切り離した。これが不法な破壊行為とワヌコ市民に誤解されたが、最終的に「女の手」は調査団から市に引き渡され、事態は収拾した。

しかし今日「女の手」は首都リマの国立博物館に展示されているため、ワヌコ市民はそれがどんなものなのか知らないまま市のシンボルとして愛着を寄せており、地元では「日本人が不法に持ち去った」という風説が信じられるようになっていた。これをふまえ、東京大学総合研究博物館が収蔵する「交差した手」の石膏型からレプリカを製作して、2013年より市内で展示を開始した。さらに2016年、コトシュ遺跡の附属博物館にて、調査団が撮影した1960年代のさまざまな写真をパネル展示し、一連の経緯についての解説をあわせて掲載して、正しい情報の発信を図っているところである。



形成期の鐘型ボトル製作手順（鶴見 2016）

p. 391 図 9-2-5

【参考文献】

関雄二（2014）『アンデスの文化遺産を活かす 考古学者と盗掘者の対話』臨川書店。

鶴見英成（2016）「アンデス文明の黄金・織物・土器・建築」『見る目が変わる博物館の楽しみ方』矢野興一編，pp. 376-398，ベレ出版。